

龍が如く 7 週行する龍  
魚

悲しいなあ@silvie

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

龍が如く7の春日一番の逆行モノ

一番はエピソード後すぐに本編一章に逆行します

全てを知った一番は今度こそ家族と仲間を守るのか

# 目次

第一章 血濡れの龍魚	1
希う再会	10



# 第一章血濡れの龍魚

二人の家族の葬儀を終えた後、一番は仲間から離れ一人異人町の空を見上げていた。  
(…どん底まで落ちちまやあ後は上がってだけで、そうつすよね若。)

自然と力が入り無意識に拳を握り締める。

涙は流さない。この想いも…思い出もそんなモンで流されて良いものではないから。

これから大変だ…星野を喪った星龍会のいざこざやコミジュルのネットワークの復旧に東京近江連合の残党狩り…やらなければならぬことは山積みだ。

だからこそ、ほんの少しだけ助かったと思ってしまう…

家族を亡くした感傷に浸る暇も無い今のこの多忙が春日一番には有り難かった。

(そうだよな…何時までも塞ぎ込んでちゃあの世の親つさんに顔向け出来ねえぜ！)

やることなんていつくからでもあんだ！一番ホールディングスだつて世界一の企業にすんだしよ！そうだ！いつそ皆もウチで雇っちゃまうか？

足立さんは結局退職金出てねえから貯蓄もねえつて愚痴つてたし、ナンバだつて弟が見つかつたんだしそろそろどかつと腰据えて働けんだろ！?

さつちゃん…キャバクラの仕事があつから厳しいか…？いや、こないだ店の女の子

達が頑張ってるつつつてたし誘うだけ誘ってみて…ハン・ジュンギは…アイツって、今無職じゃねえか？

いや、コミジュルの構成員ではあるんだろうが…今のコミジュルにやもう前程の資金力はねえしその上横浜流氓との合併で大忙しの筈…の割にヤソンヒからハン・ジュンギを返してくれとか言われなかったな。まあハン・ジュンギに抜けられちゃ困ってたらうから有り難かったけどよ…そうだ！いつそウチの経営の手伝いをコミジュルのシノギって事にしてハン・ジュンギを貸してもらおうってのはどうだ？

ハン・ジュンギなら顔も良いしCMだつて…ああいや、顔が売れちゃ不味いんだっけか？

後は趙だが…まあイケるだろ。なんてつたつて趙は正真正銘の無職だしな。

なんだよ…こうやって考えてみりや結構皆職に苦労してそうだな。そりやそっか…よくよく考えれば一緒にハローワークに通い詰めてたしな。）

自然と自分の表情が明るくなっている事に気付く。

自分はやはりあの名乗りもしなかった極道のような強さを手に入れられる気がしないが…それでも、仲間達とならなんだって出来るだろう。

「おーい、一番！お前中々クセえ台詞吐いたみてえだな？」

「私は良かったと思いますよ？一番さんらしくくてね。」

「そだねー、確かにあーんな台詞シラフじゃ何度も言えないねえ。」

「春日さん！私感動しました…これからも一緒に頑張つて行きましょうね！」

「そうだけ一番！その…これからもよろしくな！」

「モテモテねえいっちゃん…もちろん私ともよろしくしてくれるんでしょ？」

振り向くとガヤガヤと騒ぐ仲間達の姿。

無意識に広角が上がる。

「おう！皆、これからもよろしくな!!あつ、後よ実は皆に提案があつてよ…」

と、一番が今しがた思い立った一番ホールディングスへのスカウトの話題を切り出そうとした時に…

「ツ!!一番さん、後ろ!!」

「へ?」

これまでに聞いたことも無い程に焦った表情と声音で叫ぶハン・ジュンギに思わず振り返る。

それと同時に誰かにぶつかられたような衝撃がきて倒れてしまった。

(成程ね、後ろに人がいるから氣い付けろつて事かい…でもなんだつてあんなに焦つて…)

とりあえず、手をついて立とうとして…失敗する。

(なんだこりや…?力が入らねえ。

ミレニアムタワーでの無茶が今頃崇つて来やがったか?)

一番は筋肉痛が運動した3日後に来ると話していた足立さんの哀しげな顔を思い出しながらぼんやりと考える。

(てか、力が入らねえどころか眠くなつて来ちまった…皆の顔見て安心したのかね…?)

「このツ!さつさと退かねえか、このチンピラがあ!!」

掠れてきた視界の端では足立が見知らぬ男を殴り飛ばしてこちらに駆け寄つて来て  
いる。

「血が…血が止まんないよ!!ナンちゃん!どうにか…どうにか出来ないの!」

「待つてろよ一番!すぐに救急車が来るからな!!」

「私をもつと速くに気付いていれば…ツ!一番さん、気をしっかり持つて下さいよ!」

「社長!イヤ…嘘ですよね、社長!返事をして下さい!」

「一番君!一番…オイ!死ぬんじゃねえ!見捨てねえつて…一緒に居てやるつて言つたろ!!」

「一番!クソツ!返事しろつ!一番!!」

(皆…何騒いでんだ?ああ、でも…こんなねみいのは久々だぜ。

最近…録に、寝れて…無かつ…)



「ん、んんん!!くあー!よく寝たー!」

身体をグツと伸ばせばバキバキと関節の鳴る音まで聴こえる。どうやら原因は公園の硬いベンチで寝転がっていたからだろう。

「おおーなんかよく寝たせいかな身体が軽いや!」

何だかんだ四十代となった自身の身体…色々な無茶をしていたせいもあるが所々にガタが来ていたのだが、それが嘘のように軽い。

「ハン・ジユンギも睡眠の質がどうか言ってたし…寝るのってやっぱ大事なんだなあ…」

そうしみじみと感じ入って…ふと気付く。

「…てか、何処だ此処?」

確か自分は浜子さんの店の近くの橋の上に居たんじゃ無かったか?

(橋の上で寝だした俺を運ぶにしても流石に公園に放置はねえだろ…てかあそこからなら浜子さんの店の二階のが近えだろ!!)

まあ、考えても仕方ない……というか寝る前の記憶だと皆が駆け寄って来てたし、もしかすると自分は過労と言うやつで倒れたのかも知れない。

そう考えると辻褃も合う……流石に自分も何処でも構わず寝だすとは思いたくない。

「でもやっぱり公園はダメだろ……倒れたんなら病院とかじゃねえのかよ?」

と、ぶつくさ文句を言いつつ公園を出ると……

「ん……? 第三公園……? はあ! ? って事は神室町か! ? 何で! ?」

公園の出入り口にあつた看板で漸く此処が何処かを一番は理解した。

第三公園……その名前には心当たりが有つた。神室町の裏通りにある公園。確かに言われてみればあたりの景色もなんとなく見覚えがあるように思えてくる。

しかし、自分の居場所は異人町なのだと言つておいてこうも速くに神室町に来るとは……

「勘弁してくれよ……確かに寝ちまつた俺も悪いだろうけどここまでするかフツ……?」

肩を落としながら異人町までの道を頭の中で整理していると後ろから走ってくるよな足音が聞こえて振り向く。

「ハア、ハア……速いっすよ兄貴……一人で突っ走ってかないで下さいよ……」

「ミツ! ? どうしたんだお前、こんな所で?」

走って来たのは安村光雄……一番の元弟分だった男だった。

「いや……どうしたんだって、さつきタバコ屋の前で言ったじゃないですか……シノギつすよ、シノギー!」

「はあ……? シノギつてつたってお前……近江も東城会も無えのになんでシノギなんか……」  
「はあ?? 寝ボケてんすか兄貴?」

てか、来ましたよ! アイツがそうです!」

そうミツが指差した方向を見て……遅まきながら一番は違和感を抱く。

(ん?? 待てよ……なんか見覚えあんぞコイツ……)

てか! よく見るとミツが滅茶苦茶若くねえか!!?)

筋骨隆々の男……平塚を見て一番は困惑する。

(いや、間違いねえ……平塚だ。十八年前の……年末に会った……)

「おいミツ……笑わねえで正直に答えてくれ。」

今は……、今は一体何年の何月何日だ?」

「兄貴……それ、いまじゃないとダメっすか? ただでさえ裏ビデオの件の金返すつてのにこのシノギまで駄目でしたってんじや沢城のカシラに……」

「頼むつ!! 今じゃなきや駄目なんだ……」

裏ビデオ、沢城のカシラ……最早殆ど正解を言っているようなものであったがそれでも

一番は尋ねる。

なにかの間違いである可能性を信じながら。

「…2000年の12月31日ですよ。親っさんが二十世紀最後の日だって言っていたじゃないですか。」

その台詞を聞いて崩れ落ちなかったのはなんとなくそうなのだろうと諦めていたからだろうか…

スツと自分の頭に手をやる。

パンチパーマを失敗されて出来たボンバーヘッド…でも、仲間達から自分のトレードマークだとまで言われたソレ。

しかし、手に触れるのは短く揃った髪の毛の触感…身体が軽い筈だ。

此処は十八年前なのだから。

登竜門という言葉がある。

中国に伝わる伝承で黄河の上流にある龍門と呼ばれる激流を登りきった鯉が龍に転ずると言う逸話。

しかして全ての鯉が龍に成るわけではない。

龍門を登りきれずに力尽きる鯉がその殆どであり限られた極一部のみが龍に至る。

そして、今まさに龍門を登り龍に転じようとする鯉を龍魚と言う。

これは龍魚の物語。

未だ何者でもない龍魚の物語。

これより龍魚が夢破れ鯉となるか…夢を叶え龍と転ずるか…

それはまだ誰にも解らない。

## 希う再会

2000年の12月31日。

春日一番にとって全てが変わった日。

…もし、人生をやり直せるならという暇潰しでしか考えぬもしもがあったとして、春日一番は間違いなくこの日からと答える。

自分と若…荒川組と東城会、その全ての運命の歯車がずれたあの日をもしやり直せるなら…そう思った事が無いとは決して言えない。

もし、もし今やり直せるならばもっと上手くやれる…なんて嘘でも言えはしない。

東城会は愚か関西近江連合、果ては日本の政界まで巻き込んだこの絵図を全て理解しているなどと嘯ける程に一番はのぼせていない。

そう、絵図の完成形と道具を知っているだけで一番はその絵図がどうなれば良いのかという理想もどうすればその絵図を変えられるのかという手段も知らない。

なんなら、やり直して必ずしも事態が好転するとも限らない。

下手に動けば事態がもっと混乱する可能性だってあるだろう。

今回の一件で一番は一体何度命を失いかけたかわからない。

なら、やり直したとして…再び自分が死なないと言えるのか？

「いよつつつしやああああ!!!日頃の行いって奴か!!」

いや、フツーに夢見てるだけとか…? いや!なんでも構わねえ!!もっぺん若と親つさんに会えんなら夢でも奇跡でもオカルトでも関係ねえ!!今度こそ!若と親つさんは俺が守る!!!」

と、常人ならば悩んだり自身の一挙手一投足を躊躇うであろうこの状況で…春日一番は叫ぶように歓喜した。

今の状況がなんだとかそれら一切を理解不能であるが不都合では無いと一蹴して家族の為に燃え上がる…春日一番とはそういう人間であった。

「ミツ!!俺あ今から若んトコ行ってくる!こうしちやいらんねえ、待つてて下さいよ若あ!春日一番、ただいま参ります!!」

「へ!?ちよ、ちよつと待つて下さいよ兄貴!!さつき言つたじやないつか!このキリトリまで失敗しましたじや沢城のカシラに殺されちまいますよ!」

「止めんじやねえ!!俺あ今度こそ若と親つさんを!!」

今にも走り去らんとする一番を引き留めようと安村が縋り付くも縋り付いた安村ごと引き摺って駆け出す一番。

しかし、その一番の前に筋骨隆々の男…平塚が立ちはだかる。

「お前から借金取りだな？ 悪いが返せる金はねえんだ。

引き取って……」

「邪魔だああああ!!」

一番と安村の会話を断片的に聞いた平塚は二人を借金取りと断定し帰って貰おうと声をかけた。

自身の体軀で少し威圧してやれば帰るだろうと踏んだ平塚だった……が、平塚に誤算があるとすれば彼の前に居るは普通の借金取りのような下っ端のチンピラ非ず。

かの伝説の龍が認め、暗殺者一族の一人が龍を継ぐに相応しいとまで評価した男であつた事だろう。

一番は安村を引き摺つたままに右腕を廻し勢いをつけるとそのまま平塚を殴り飛ばした。

一番のパンチを頬に受けた平塚は風に吹かれた羽のように吹き飛び地面で数回バウンドまでして漸くその威力を消費しきり停止する。

「……っ!? あ、兄貴って……ここまで喧嘩強かつたんでしたっけ……?」

眼の前で軽く数メートルは吹き飛んだ平塚を見ながら殴り飛ばした張本人である一番をドン引きしながら見遣るも現状を受け入れられず安村が手を離してしまつた際に既に走り去つてしまいもうどこに行つたかも解らなかつた。



「……一応、シノギはこれでオツケーだよな……」

白目を剥いて倒れる平塚から財布を抜き取ると安村は呆然と呟いた。

「今行きますっ!!若ああああ!!」

そう叫びながら神室町の通り爆走する一番。異人町のドラゴンカートにて磨かれたドリフトと回避のセンスを遺憾なく発揮したその走りは下手な原付きよりも速かった。

くくく

駆け回る一番のポケットが音と共に震える。

「ん!?電話…若からか!!」

…沢城のカシラ…?なんだ一体??

はい、もしもし一番です!

『ほお…お前にしては珍しく2回以内に出たな。』

お前、ひよつとしてまだ地回りしてんのか?』

「いえ!シノギも終わったんで若の元へ走ってます!!」

もう一分もありや着くんで電話切っていいですか!」

『あ?…なんだイチ、お前年末だからってえらく気が利くじゃねえか。』

ま、俺に対する口の利き方はそれに免じてやる…さっさと行け、若がお待ちだ!』

「へい!ありがとうございます!!」

『あとわかっているとと思うが、変な場所に入入りすんじゃねえぞ。若にもしもの事があ  
りゃあ…』

「カシラ、若の事なら心配ありません。

若は俺が命にかえても御守りします。」

『……当たり前的事言ってるじゃねえ、バカ野郎が。』

電話が切られたと同時に一番は荒川真斗のマンションの前に到着していた。

自動ドアが開く間も惜しいと足踏みする一番はフロントまで駆けていくとホテルの  
従業員に詰め寄る。

「若!…いや荒川真斗さんは…!」

「本日はまだお見えになつておりませんが。」

「そうっすか…」

その返答に一番が肩を落としていると近くのエレベーターのドアが開き中から一人  
の男が出てくる。

黒髪をオールバックに撫で付け、質のいいスーツとネックレスをした車椅子の男。

見紛える筈も無い。

この人物こそ、一番にとって大切な家族であり憎むべき仇であり共に歩むべき兄弟……荒川真斗であつた。

「若……若だ、へへへ……ホントに若が……若、若……」

若あああああ!!!」

しかし、一番に恨みなど無い。有るのは再び会えた歓喜のみ。

一番は大粒の涙を流しながら真斗に縋り付いた。

「!!?ばっ……お前、何してんだイチ！こんな所で何考えてんだお前!!」

「若あああ!!すんません！俺が不甲斐ないばかりに……若あああ!!!」

「おい！お前……いい加減にしねえと……っ！」

瞬間、真斗は気付く……自身に向けられている視線に。

フロントに居た家族連れからの好奇の目。子供が父親に何をしているかでも尋ねているのだろう……そしてそれに困り顔を浮かべる父親と何故かこちらを見ながらガッツポーズをして興奮気味の母親。

人一倍周囲の目に敏感な真斗だからこそその視線に気付いてしまう……そして、それに耐えられない。

「イチ!!とにかく離れろ！テメエ！俺は男に抱き着かれて喜ぶ趣味なんか無えぞ!!」

「嫌です!!いくら若の頼みと言えどこればかりは聞けません!!この手え離したら…また若がどつか行つちまうんじゃねえかって…俺、俺!!」

「行かねえよ!!どこにも行かねえから離れろ!!」

無理矢理に一番を引き剥がそうと試みるも一番の万力が如き腕力にまるで歯が立たずせめてスーツが汚れないようにと一番の顔を両手で押しのけながら真斗は叫ぶ。

もう既に先程の家族は父親が子供の目を両手で覆っているし母親は携帯でバンバン写真を撮っている。

「イチ!!頼むから離してくれ!!」

「若あああ!!俺あ今度こそ若と親っさんを必ず御守りしてみせます!!」

「わかった!!わかったから!!」

逆行した龍魚は未だ自身の望む未来を描けない

されど、その顔は離れ離れとなった家族に会えた…迷子の幼子のようで、幸せそうなものであった。

ざっくり人物紹介

春日一番

龍が如く7の主人公にして如くシリーズ屈指の聖人。

兄さんがダンプでぶつ込みをかました事で有名なソーブランド桃源郷にて生まれ、店長である春日次郎に育てられる。

その後父である次郎の死により荒れるが紆余曲折あり東城会の3次組織荒川組の組長荒川真澄に救われ自身も荒川組に入る。

龍が如く7のストーリーは荒川組の沢城丈を庇って一番が服役する事から始まる：が今回はそうならない。

底抜けに明るい性格で高校中退とは思えないレスバの強さを持つ。

また、7本編では如くシリーズの象徴であった桐生ちゃんとは似ているようで対照的な性格で何事にも巻き込まれる事が多かった桐生ちゃんと違い率先して関わりに行く姿勢をみせた。

自身を助けてくれた荒川真澄に途轍もない恩義を感じており彼に拳銃で撃たれた後でもこの世で最も尊敬する人物であると言い切る程であった。

ちなみに、サブストーリーで会社経営を行い横浜一の大企業の社長となっていたりする。ついでに会社の金で衛星兵器まで造ってる

今回はあらゆる技能を極め自身を鍛え抜いた状態で逆行した。

ゲーム的に言えばレベルカンスト全ジョブレベルマックスのアルティメット春日一

番。

荒川真斗

龍が如く7のラスボス。

不器用な男が多い如くシリーズのラスボスの例に漏れず不器用な男。

産まれた頃からあらゆるモノに手が届き望むがままに育てられたが自身の持つものではなく、また下半身に障害を抱えていた為に自信を持つことも出来ず周囲への劣等感やらをハチャメチャに拗らせていた。

7本編では残念な事に直前に即死攻撃をぶつ放す天童と戦う為滅茶苦茶弱く感じる。頭脳タイプで戦闘は専門外だったのだろう。

本編ではサテライトレーザ喰らってもピンピンしてた癖にモブに刺されて死んでしまう。

一番の事はなんだかんだ憎からず思っていた模様。